

# 松江市薄井原古墳出土資料について

仁 木 聡

はじめに

1. 薄井原古墳について
2. 出土遺物について

3. 考察－薄井原古墳の特質－

おわりに

はじめに

本稿は、薄井原古墳出土資料を既刊報告書（山本・近藤1962）の知見に導かれながら、図化可能な出土資料を悉皆的に報告し、旧稿（仁木2016・2019b）では言及できなかった薄井原古墳の歴史的位置づけを考察したものである<sup>(1)</sup>。本稿の構成は、第1章に薄井原古墳の位置と歴史的環境について私見を述べ、第2章で出土資料の報告と分析、第3章でそれを受けて一・二の考察を行うこととする。

## 1. 薄井原古墳について

薄井原古墳は、旧国では出雲国島根郡山口郷（松江市北東部）に所在する墳丘長約50mの前方後方墳である（図1・9）。後述するようにTK10型式併行期新相段階に築造された古墳で、出雲における古墳

時代後期の前方後方墳としては、ほぼ同時期に築造された出雲東部最大の山代二子塚古墳（94m・出雲国意宇郡山代郷所在）に次ぐ規模である<sup>(2)</sup>。

### 1) 薄井原古墳の立地について

薄井原古墳の位置する島根半島東部（宍道湖北岸＝湖北地域＝主に旧出雲国の秋鹿郡・島根郡）の古墳分布について、その概略を記せば（図2）、古墳時代中期は、古曾志地域（『出雲国風土記』に記された「狭田国」の中心地と推定される）に大型古墳の築造が顕著である。古曾志周辺には、王陵系埴輪（高橋2008・田中2015）が出土する古墳時代中期前葉の大型円墳の古曾志大塚1号墳（47m）をはじめ、中期中葉には三段築成の可能性が指摘される（中司2011）一辺50mに達することがほぼ確実な巨大方墳の丹花庵古墳（47m）が築造される。さらに中期後葉には、出雲東部勢力形成期段階の首長墳の一つで

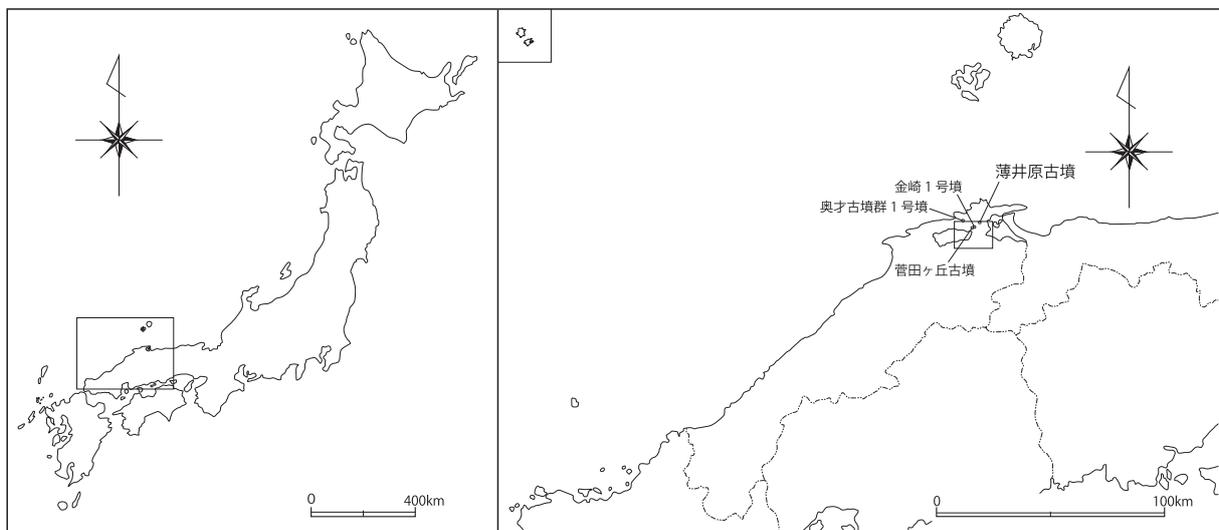


図1 薄井原古墳の位置





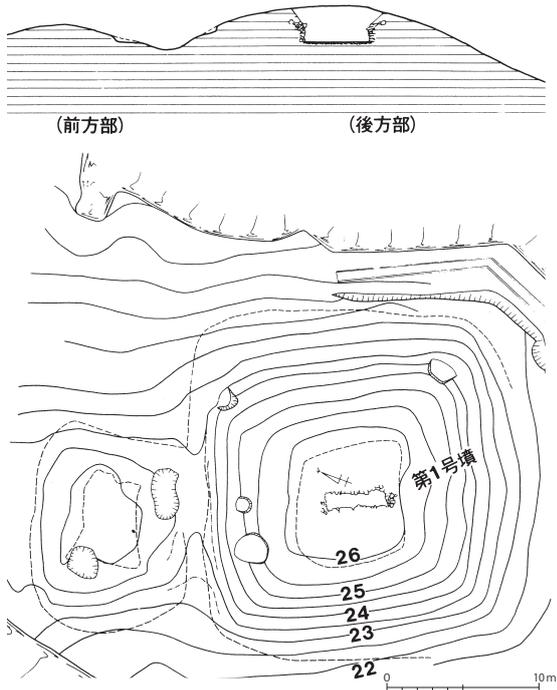
ある前方後方墳の古曾志大谷1号墳(45m)が築造される。古曾志は宍道湖北岸の入海である「佐太水海」を取り巻く地域で、そこに注ぐ佐太川をさかのぼれば、現在の佐太神社付近で、極めて低い分水嶺を越えることができ、後述する奥才古墳群のある恵曇の日本海側に抜けることができる。すなわち、宍道湖・中海を結ぶ大橋川を經由せずとも日本海と繋がることの出来る島根半島東部の海上交通ルートの要衝として評価できる<sup>(3)</sup>。

古曾志大谷1号墳築造段階のTK23-47型式併行期は、20~50m級の前方後方墳や造出し付の方墳が、古曾志を含め島根半島中央部各所で築造されるが、古曾志では古墳時代後期に大型古墳(首長墳)の築造が停止する。これと入れ替わるように、薄井原古墳が築造され、大型古墳の継起的な築造は島根郡に限定される。すなわち、6世紀中葉段階に、古墳時代中期以来の水上交通の要衝であった古曾志ではなく、意宇郡から島根郡にいたる『出雲国風土記』記載の枉北道の結節点(東は日本海へ、西は宍道湖北岸へ)という新たな論理による交通路の要衝に、薄井原古墳が築造されたのではないかと想像する<sup>(4)</sup>。そのことは、継体朝におけるヤマト王権との通交関係形成を契機にしている可能性が考えられる(仁木2019a)。

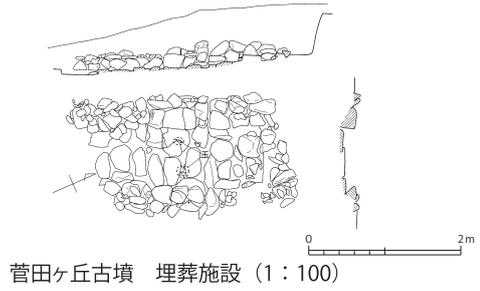
## 2) 薄井原古墳と社部(臣)氏について

ところで、薄井原古墳の被葬者を『出雲国風土記』(以下、『風土記』)に記載される島根郡大領社部臣訓麻呂の祖・波蘇と想定する向きがある(内田2001)。波蘇(等)は恵曇の開発を行った人物で<sup>(5)</sup>、『風土記』における「祖」・「父祖」の用例から、恵曇開発伝承記事は、大化前代の出来事と指摘されている(関1997a・前掲内田)。出雲における社部(臣)氏について、初めて言及した山本清氏は、「出雲地方の土地固有の氏の名ではなく、中央勢力の地方浸透の姿として、地方民が部に編成され、それを支配していた地方豪族はその統率者の地位を与えられてとなえることになった氏の名であろう」とされ(山本1982)、中央の社部氏の本拠地については、撰津国島上郡古曾部(高槻市古曾部町)が指摘されてきた

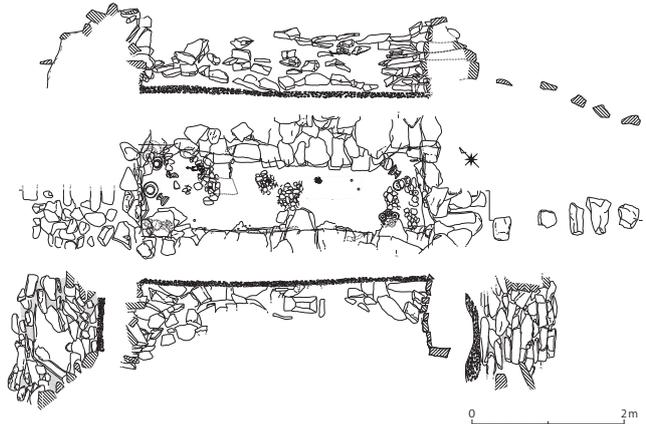
(佐伯1981ほか)。一方、大王陵の造営地に分布する土師氏(塚口1998)の居住がほぼ確実な撰津国三島地域においては(平林1992)、『日本書紀』・『新撰姓氏録』・『延喜式』の記載から、出雲連氏—土師連氏—社部氏の地縁関係やと竹村屯倉(屯田)をめぐる職掌による氏族間の密接な関係が認められるとし、社部氏が畿内以外の出雲で分布するのは偶然ではないとする文献史学の考察がなされている(丹羽野・平石2010)<sup>(6)</sup>。また、出雲における社部臣氏の故地は、佐太水海沿岸域における秋鹿郡古曾志であったとする文献史学の見解がある(加藤1964・関1997)。さて、薄井原古墳の被葬者が社部臣氏の系譜にのぼる人物であれば、古曾志での古墳築造が理解しやすい。しかし、6世紀以降に古曾志に大型古墳の築造は行われていない。ただし、評制下においては、薄井原古墳が位置するは島根郡と古曾志の所在する秋鹿郡の両郡が一体であり(島根評)、評の官人には後の島根郡司家(社部臣氏)が就いたと説かれている(荒井2009)。また、『風土記』島根郡条と秋鹿郡条に「陂」と「池」の記載が集中することは、社部臣氏の開発伝承と響き合う。詳細は旧稿に譲るが、薄井原古墳が築造された松江市坂本町の近傍には、社部氏関係地名や<sup>(7)</sup>、島根郡家比定地の納左遺跡<sup>(8)</sup>、屯倉の遺称地を想起させる「太田」地名<sup>(9)</sup>が存在することは示唆的である。しかし、薄井原古墳の被葬者像を、『風土記』秋鹿郡条に記された「恵曇の開発」を行った社部臣訓麻呂の祖・波蘇等(大化前代の人物と想定)に比定することには、慎重でありたい(仁木2016)。ただ、「波蘇等」は「(社部臣訓麻呂の祖先である)「波蘇たち」というように、社部臣訓麻呂と血縁関係にある複数の人物像を伝えている意とも読み取ることができる。このことから、7世紀代の「島根評」と6世紀以降の大型古墳の築造動向にも鑑みれば、第3章で後述する薄井原古墳の二つの石室の存在は、それぞれの石室に葬られた被葬者の関係性を考える上でも、なにがしかの示唆を与えてくれよう。さらに、後述する継体大王の権力基盤である撰津・山背における彼我の考古学的な接点を踏まえれば、古墳時代後期における薄井原古墳



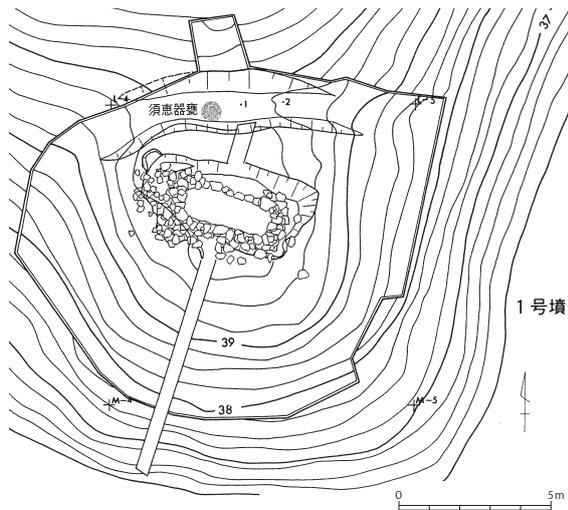
金崎1号墳 主体部 (1:500)



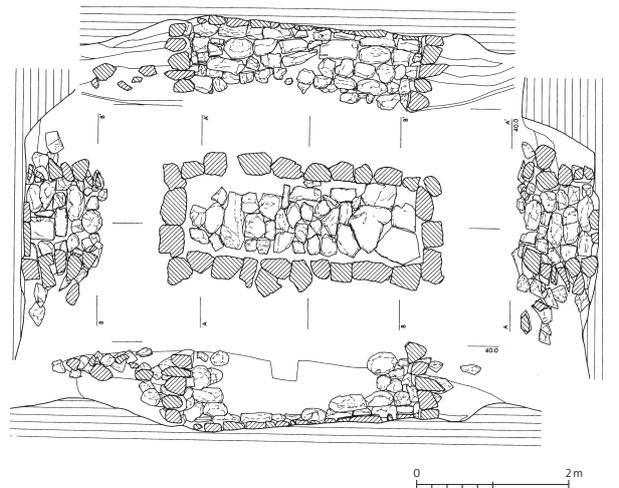
菅田ヶ丘古墳 埋葬施設 (1:100)



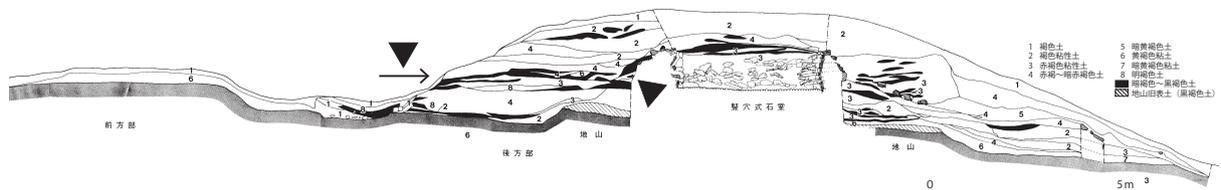
金崎1号墳 石室 (1:100)



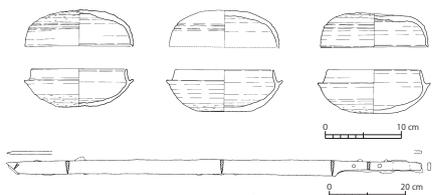
奥才古墳群1号墳 主体部 (1:250)



奥才古墳群1号墳 石室 (1:100)



金崎1号墳 盛土 (1:200)



奥才古墳群1号墳 盛土 (1:200)

奥才古墳群1号墳 出土遺物 (1:10) (1:20)

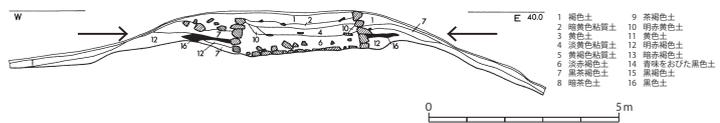


図3 島根半島東部における新来の石室墳

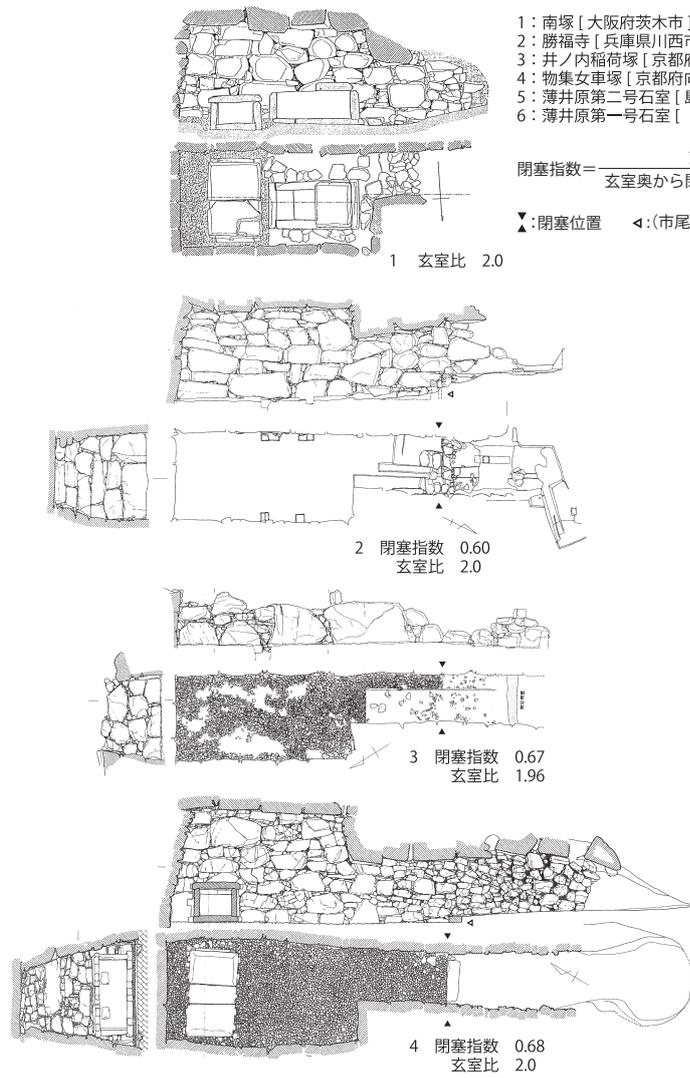
は、大化前代における両地域の社部（臣）氏を考  
る上で、重要な考古資料になることは評価しておき  
たい。

### 3) 薄井原古墳築造前夜の新来的な石室墳 (図3)

さて、薄井原古墳が位置する島根半島東部（宍道  
湖北岸＝湖北地域＝主に旧出雲国の秋鹿郡・島根郡）  
(図1・2)は、古墳時代前期後半から奥才型木棺  
(赤澤2002)をはじめとする外来的な要素の強い埋  
葬施設を設けた古墳が多数築造されている地域でも  
ある。薄井原古墳もその一例で、出雲における導入  
期の横穴式石室墳であり、後述する畿内系石室・石  
棺を埋葬施設としている。初期の横穴式石室導入期  
にあたる古墳時代中期末葉から古墳時代後期前葉に  
かけては、島根半島東部で特徴的な石室墳が顕著で  
ある(図3)。TK23型式-TK47型式平行期の金崎1  
号墳(前方後方墳・20m)には、後方部に初期横穴  
式石室(土生田1981)、あるいは堅穴系横口式石室  
(柳沢1982)とされる外来的な石室が設けられる。  
かつて筆者も壁体の積石間が白色粘土で充填されて  
いること、多数の須恵器が石槨内の周囲に納められ  
ていること、出土遺物に金製品や特殊な形状の須恵  
器、青銅製紡錘車、鉄矛などの渡来系遺物が副葬さ  
れている等の状況証拠から、堅穴系横口式石室、あ  
るいはその影響を受けた列島の堅穴式石槨とは別系  
譜の埋葬施設、もしくは初期横穴式石室の影響を受  
けたものであると考え、ここでは詳細を省くが、そ  
の入り口を南側小口と考えた(仁木2014)。最近、  
朝鮮半島の類例比較から堅穴系横口式石室の可能性  
が高く、入り口については韓国の蔚山古雲化里30号  
墓との類似性から、北側小口である可能性が指摘さ  
れている(高田2019)。また、石室構築に際しては  
墳丘端部に土塊を用い(図3の▲)、墳丘の構築に  
際して盛土に一時的な水平面を設ける等(図3の→  
←)、横穴式石室の先駆けになる特徴的な盛土を行っ  
ている(仁木2019a)。さらに、石室の下面は地山  
を台状に整形しており、その端部から石室構築に伴  
う一次墳丘を構築する特徴がみられる<sup>(10)</sup>。いわゆる  
「墳丘後行型」の埋葬施設である(吉井2002)。また、  
松江市鹿島町(旧秋鹿郡)には、TM47～MT15型

式併行期の奥才古墳群1号墳(方墳?・10m)が、  
「墳丘後行型」の特徴的な石室を有している。堅穴  
式石槨の一種と考えられているが、石室を構築しな  
がら墳丘を構築(盛土)しており、石室基底部を設  
置するために、地山を浅く掘りくぼめた掘り方の面  
に合わせて、墳丘盛土の水平面を黒色土で形成する  
点は、金崎1号墳に通底する。また、石室の西小口  
は石材を多く積み上げており、横口の様相を示し、  
石室内部の底面には壁体と間隙を有した石敷が行わ  
れている。このことから、石室内部に木槨を納めた  
堅穴系横口式石室の影響を受けた外来的(渡来的)  
な要素が強い石室と評価できよう。このことは、天  
井石が木蓋である可能性が報告されていることとも  
整合的である。また、金崎1号墳と同様に石室内に  
須恵器を副葬していることとも、示唆的である(奥  
才古墳群1号墳は須恵器枕か?)。ところで、奥才  
古墳群1号墳の石室内に全長109cmの鉄刀が一口副  
葬されている。出雲ではTK23-47型式以降、80cmを  
超える鉄刀を副葬する古墳が増加し、関部に挟り  
を入れる鉄刀の類例が散見される(仁木2015b)。こ  
のことは、6世紀前半の継体朝期から西日本各地の  
中小規模墳(横穴式石室墳多数含む)で、継体威信  
材(高松2007a・b)を含む装飾大刀や馬具の副葬  
が顕在化していることから(仁木2019b)、TK23-47  
型式平行期の雄略朝期にも中小古墳の被葬者に対す  
る先駆的な節刀等をはじめとする威信材配布の想定  
(前掲仁木2015b)は蓋然性が高く、西日本各地で  
広範に行われていたものであったと予察する。なお、  
今回は図示し得なかったが、奥才古墳群1号墳の鉄  
刀は関部に挟りを有する資料であることから、倭装  
の可能性が考えられる。また、金崎1号墳の近傍に  
は、TK23-47型式併行期の菅田ヶ丘古墳(前方後方  
墳・50m)が築造されている。埋葬施設の規模や石  
敷のあり方が、奥才古墳群1号墳と類似することか  
ら、菅田ヶ丘古墳の石室は、同種の石室であった可  
能性が考えられる。このような、新来の石室が集中  
する地域(島根半島東部＝湖北地域)に、導入期横  
穴式石室墳の薄井原古墳が築造されている事実は、  
極めて示唆的である。

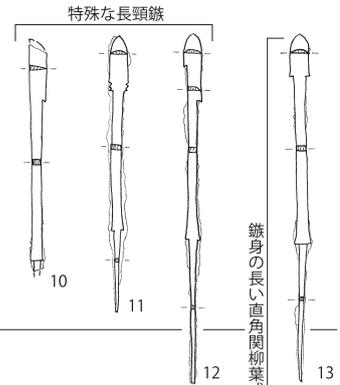
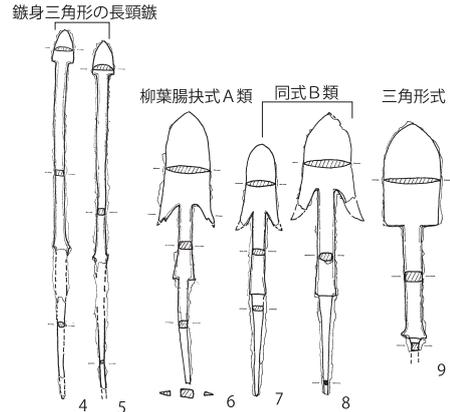
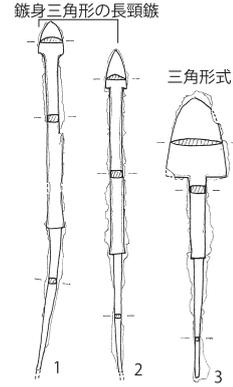
摂津・山背



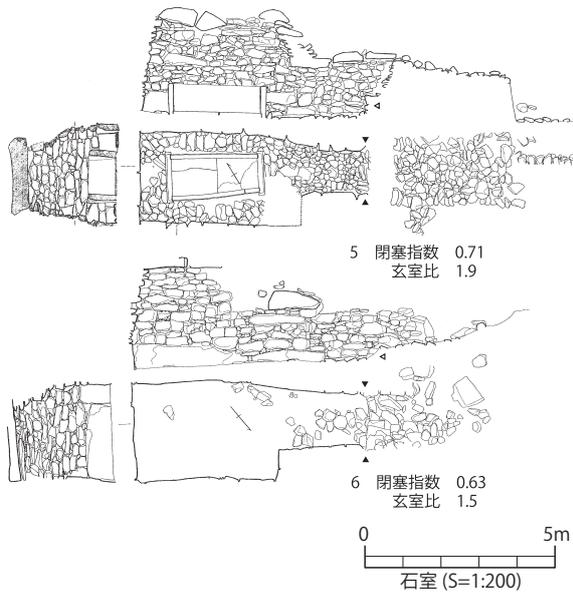
- 1: 南塚 [大阪府茨木市]
- 2: 勝福寺 [兵庫県川西市]
- 3: 井ノ内稲荷塚 [京都府向日市]
- 4: 物集女車塚 [京都府向日市]
- 5: 薄井原第二号石室 [島根県松江市]
- 6: 薄井原第一号石室 [同上]

閉塞指数 =  $\frac{\text{玄室長}}{\text{玄室奥から閉塞位置までの距離}}$

▲: 閉塞位置    ◁: (市尾墓山型) 段状区画施設



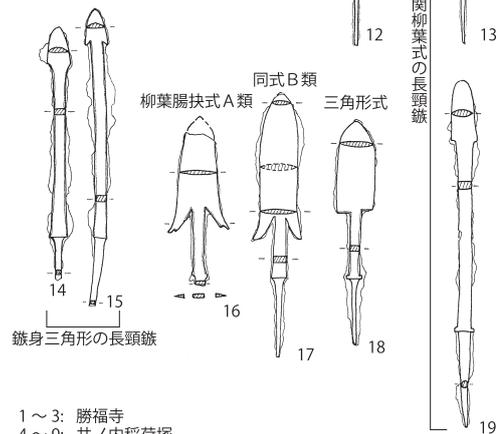
出雲



5 閉塞指数 0.71  
玄室比 1.9

6 閉塞指数 0.63  
玄室比 1.5

0 5m  
石室 (S=1:200)



鐵身三角形の長頭鏃

- 1~3: 勝福寺
- 4~9: 井ノ内稲荷塚
- 10~13: 物集女車塚
- 14~15: 伝宇牟加比売命御陵
- 16~18: 薄井原第二号石室
- 19: 御崎山

14~18は筆者実測、そのほかは各報告書再トレース

0 10cm  
鉄鏃 (S=1:4)

図4 継体天皇擁立・支持勢力(摂津・山背)と薄井原古墳(出雲東部)の石室・石棺・鉄鏃の類似性

#### 4) 薄井原古墳と摂津・山背地域の畿内型石室について (図4)

山陰における初期横穴式石室墳の系譜については、畿内系や九州系、あるいはそれらの複合的な折衷系があるものと理解されている(小田1980、川原1980、山崎1985、土生田1991・1994、角田2007・2009)。

薄井原古墳で特筆されることは、後方部に二基の横穴式石室(第一号石室・第二号石室)が設けられていることにある。後方部が長方形を呈していることから、二つの石室は墳丘構築前に企画されていた双室墓墳の可能性が高いことが指摘されている(前掲山本・近藤)。首肯すべき見解として、行論の前提としたい。この二基の横穴式石室については、いわゆる畿内の横穴式石室の影響を強く受けた石室と考えられており(山崎1985・角田1985等)、とくに山崎氏は薄井原古墳の第二号石室・石棺が、物集女車塚古墳の石室・石棺と酷似しているという重要な指摘を行っている。筆者は先年、畿内型横穴式石室(土生田1991)、あるいは畿内型石室(太田2003)の典型例とされる物集女車塚古墳[京都府向日市]に酷似した畿内系石室(山崎1985・鈴木2011)の一つとして再評価した(仁木2016)<sup>(11)</sup>。

すなわち、摂津の猪名川・淀川水系(山背の桂川水系)には、物集女車塚古墳の石室に類似することと、物集女車塚古墳の石室羨道部長よりその長さが短いことから、古い要素持つことが指摘されている南塚古墳(宮原1988)[大阪府茨木市]をはじめ、両古墳の石室との類似が指摘されている勝福寺古墳第1石室[兵庫県川西市](宮原1988・岡野1991)、井ノ内稲荷塚古墳[京都府向日市](富山2007)の初期畿内型石室墳が、6世紀前半のMT15型式併行期~TK10型式新相併行期に築造されている。薄井原古墳を含め、これらの石室の平面プランを比較すれば、羨道閉塞の位置関係も酷似していることがわ

かる。薄井原古墳の場合、第一号石室の玄室長・幅比が1.5、同じく第二号石室が1.9となる。第二号石室は物集女車塚古墳に類似する石棺を内包することと併せて、南塚・勝福寺類型の玄室長・幅比2.0に近似する。南塚・勝福寺の石室類型は、継体擁立・支持勢力に与えられた規格と評価されているが(梅本2007)、薄井原古墳の二つの石室は、この範疇に有意に含まれる石室と評価して、大過なからう。また、薄井原古墳第二号石室に内包された石棺に類似する組合式石棺が、物集女車塚古墳、南塚古墳の他、猪名川水系の御園古墳[兵庫県尼崎市]、桂川水系の大覚寺3号墳[京都市左京区嵯峨野]に存在している点(秋山1988)も看過できない。すなわち、薄井原古墳の被葬者が物集女車塚古墳の被葬者と個別の通交関係(社部氏)にあったとする説(前掲内田)に限定する必要はなく<sup>(12)</sup>、摂津・山背をその政治的基盤とした継体大王との君臣的關係、あるいはその擁立・支持勢力との政治的・擬制的同族関係が結ばれた可能性が極めて高いと考えられるのである(仁木2016)。ただし、薄井原古墳第一号・第二号石室共に、①九州系石室の要素である「腰石」がみられる点(ただし、第二号石室は明確な腰石はない)、②「胴張の側壁」(とくに第二号石室に顕著)、③石室構築の石材の大半に小ぶりの石が用いられている、④天井みあげ面の隅角を解消して天井を丸くする手法は、摂津の猪名川・淀川水系(山背の桂川水系) = 「畿内型石室」とは異なる要素であり、注意を要する。すなわち、①「腰石」(小林2019)・②「胴張の側壁」(中司2003)については、日本海側各地における導入期の横穴式石室と共通し、④「天井みあげ面を丸くする手法」が北部・中部九州に求められていることから(土生田1991)、薄井原古墳の被葬者(集団)と九州北部勢力を中心とする各地の首長層との交流が示唆される。

【表1】石室計測値(山本・近藤1962より)

石室名	全長	玄室長	玄室奥壁幅	玄室前幅	羨道長	備考
第一号石室	7.6m	3.9m	2.6m	2.4m	3.7m	羨道入口1.3mから閉塞
第二号石室	8.0m	4.4m	2.3m	2.1m	3.6m	羨道入口1.8mから閉塞石・排水施設

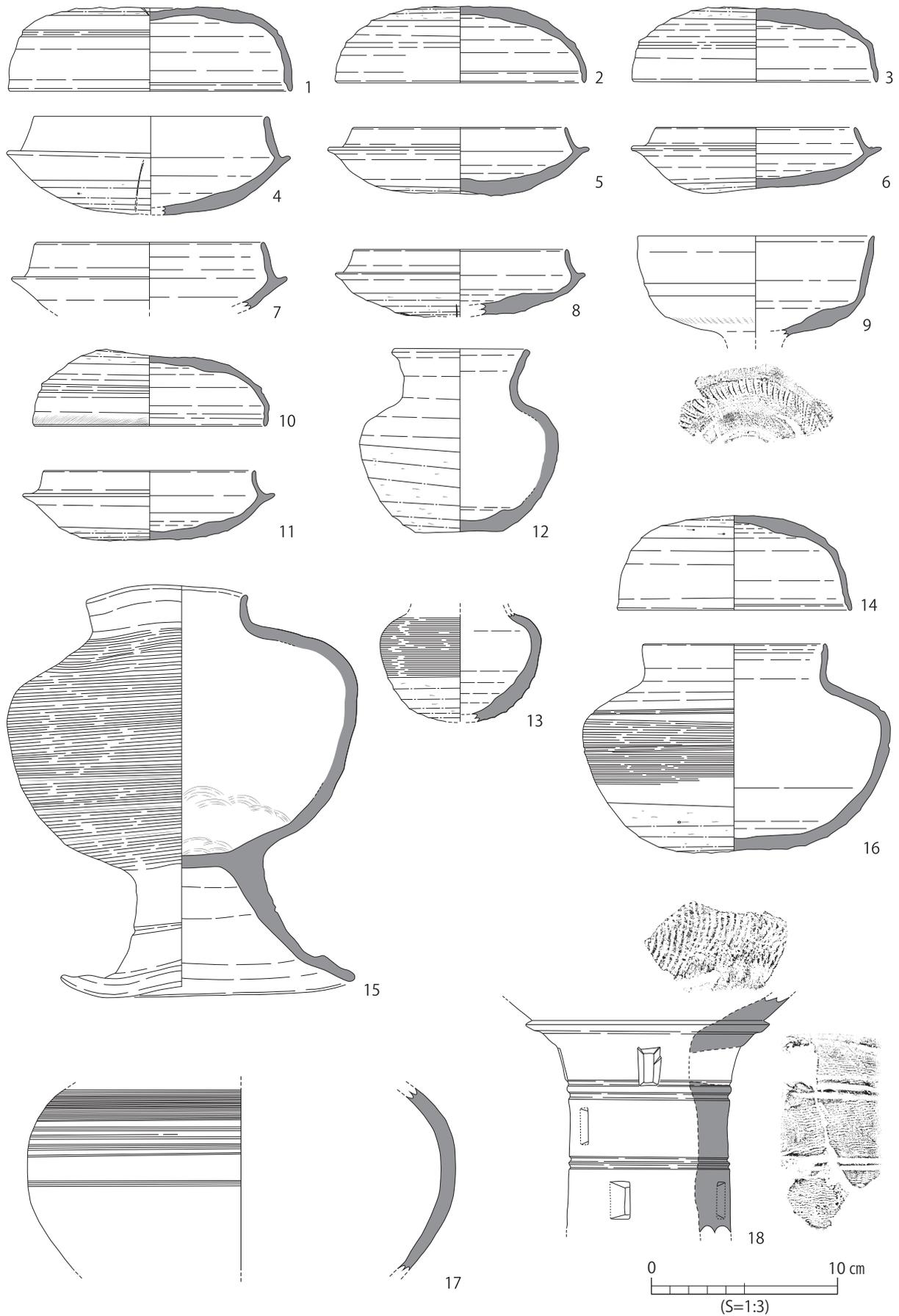


図5 薄井原古墳出土資料（1）

## 2. 出土遺物について

### 1) 須恵器 (図5・図6-1)

薄井原古墳からは、細片を除くと実測可能な19点の須恵器が出土している。ここでは、大谷晃二氏による出雲編年(大谷1994)に依拠して、その編年的位置づけについて考察を進める。

図5-1・4・7はくびれ部出土の蓋坏である。これまで前方部出土と報告されてきたが、資料内面に「くびれ部出土」の注記がなされていたので、本稿ではくびれ部出土の資料と表記する。後述する他の蓋坏と比べて大型で、とくに図5-1の口縁部端は、「 $\alpha$ 2類」=「厚手または肥厚したも口縁部の端部付近に沈線を入れ、段状に仕上げるもの」(大谷1994)で、古い様相を示す。薄井原古墳の築造年代の上限を示す須恵器資料である。図5-1と4は、法量のバランス関係、焼成・胎土、及び天井部や体部に施された一本線のヘラ記号の共通性から、セット関係にあった蓋坏と考えられる。前者の復元口径15.2~15.8cm・器高4.5cm、後者の復元受部径15.3cm(口径12.6cm)・同器高5.3cm。図5-7の復元受部径は14.8cm(口径12.2cm)。

図5-8・9・13・17・18と図6-1は、前方部上面で出土した須恵器である。図5-8は受部径13.4cm(口径11.4cm)、器高3.7cmで、外面天井部に一本線のヘラ記号が施されている。図5-9は口径12.6cmの高坏で、体部下面に櫛状工具による連続刺突文が施されている。口縁端部内面に傾斜する端面を形成している。焼成は不良で色調は黄灰色をなす。図5-13は、直口壺等の可能性が考えられる資料である。復元胴部径8.1cm、頸~肩~胴部上半にかけて細かなカキ目が施されており、胴部下半は丁寧な回転ヘラ削りが施されている。直口壺とした場合、頸部より上部は失われているが、大きく外反するものとは考えにくく、底部も丸底であることから、古い様相とみなすことも可能である。なお、直口壺は口縁部が直口するタイプ(A型)と外半するタイプ(B型)に分類されており、A型からB型、そしてTK43型式新相(前掲大谷の出雲4期)にB型の定型

化(B2)という編年観が示されている(岩本2016)。本資料は直口するタイプと考えられ、A型からB型定型化以前の過渡的な資料とみなすことも可能である。図5-17は壺の胴部で、肩部~胴部上半はカキ目が施されている。内面はナデ調整で敲き痕跡は認められない。図5-18は親壺のある器台である。外面には波状文、最上段の透かしは四方向にある。焼成は不良で、淡い黄灰色をなす。また、胎土と焼成不良の様相が酷似した器台脚部と子壺の一部とおぼしき資料が出土している(図6-1)。透かし等はなく、外面は丁寧にナデ消されているが、格子敲きの痕跡をわずかに残している。出雲型子持壺(池淵2004)の脚部に相当する可能性が考えられる。

図5-2・3・5・6・10・11・12は第一号石室から出土した資料群である。これらは既刊報告書に記されているように、羨道部で床面に密着して出土している資料である(図9参照)。並べ置かれたような出土状況と、資料の胎土・焼成、法量の類似性から、図5-2・5、図5-3・6、図5-10・11がセット関係になる可能性が高い。また、これらの資料は右回転する轆轤上で製作されており、内面天井部(底部)には静止ナデが行われている共通点を有する。図5-2の口径13.3~5cm・器高4.1cm、図5-3の口径13.0cm・器高4.0cm、図5-10の口径12.3cm・器高4.2cmで、口縁外面には斜め方向に刷毛上の工具で調整した痕跡が見られる。図5-5は受部径14.0cm(口径11.4cm)・器高3.7cm、図5-6は受部径13.4cm(口径10.6cm)・器高3.6cm、図5-11の受部径13.5cm(口径11.3cm)・器高3.8cmである。図5-2・3の蓋の口縁部は、いずれも $\alpha$ 4類(前掲大谷)で、くびれ部出土の蓋(図5-1)と第二号石室出土の短頸壺の蓋(図5-14)に比べて、口径が小さくなり、天井部の回転ヘラ削りも粗雑になるなど、後出的な要素を有している。なお、図5-10の口縁端部は、「 $\beta$ 類」=「端部からさらに情報に沈線をめぐらすもの。端部はまるく、段上を呈していない」(前掲大谷)の要素が観取できる、図5-11の坏身の口縁部の立ち上がりも、角度がきつくなることから、図5-2・3と比べて新しい要素を有

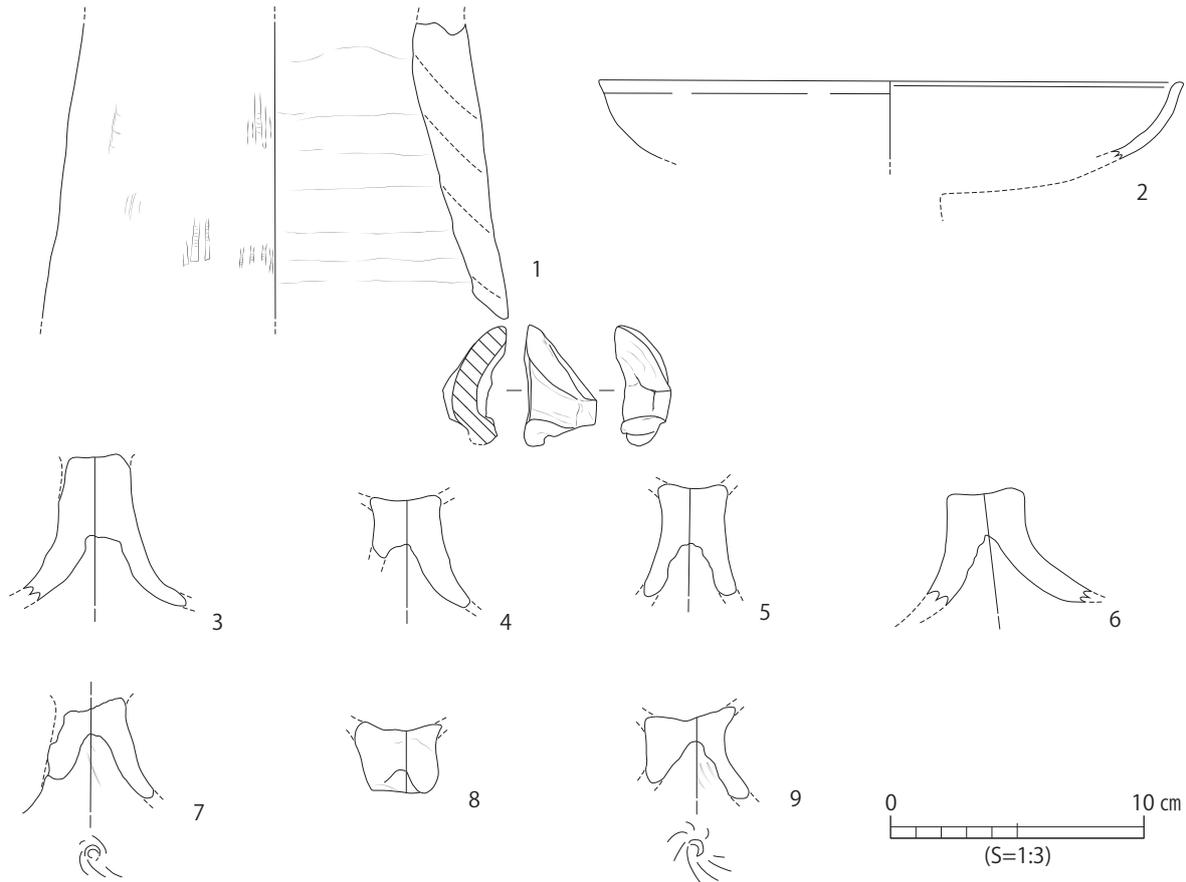


図6 薄井原古墳出土資料（2）

した資料とみなすことができる。これら、第一号石室から出土する蓋坏は、大谷編年の出雲3期～4期の過渡的な様相がみられ、TK43型式新相段階に位置づけられるものと考えられる。図5-12の直口壺は、口径7.0cm・器高10cm、胴部下半に回転ヘラ削りが施された平底の資料である。特徴的な点としては、口縁部は下半が直口し、上半から外反する点、口縁端部に稜を有する点である。この資料も前述したA型からB型への過渡的な様相を示す資料と考えられる。

図5-14～16は第二号石室から出土した資料である。既刊報告書で報告されているように、石棺と北壁の間から出土している。図5-14・16は蓋付の短頸壺のセットである。図5-14の蓋は、口縁部はやや歪んでいることから、口径11.9（短径）～12.4（長径）cm、器高はやや高く5.1cmある。口縁端部は「 $\alpha$ 4類」＝「肥厚させない薄手の口縁部の端部に

沈線を入れ、 $\alpha$ 3類（口縁端部を肥厚させ、中略、端部を段状に仕上げるもの）よりもゆるい段上に仕上げるもの。ナデにより沈線が不明瞭になるもの」（前掲大谷）で、天井部の回転ヘラ削りの範囲も広く、後述する第一号石室の坏蓋に比べて古い様相が観取される。図5-16は口径9.8cm、胴部最大径16.0cm、器高11.3cmの短頸壺である。肩部と胴部中央に幅0.25cmの沈線がそれぞれ1条施されており、胴部上半に顕著なカキ目、同じく胴部過下半に回転ヘラ削りが施されている。また、焼成時には図5-14と重ね焼きをしたとおぼしき痕跡が認められる。図5-15は、脚付きの短頸壺で、セットとなる蓋は存在しないが、肩部に重ね焼きの痕跡が認められる。歪んだ口縁部の口径8.5cm、同じく脚部裾も歪みが見られ、その口径は15.3cm、器高は22.3cmである。頸部から脚部までカキ目が施されているが、胴部は平行敲きが行われた後にカキ目が施されている。

## 2) 薄井原古墳の編年の位置づけ

次いで、薄井原古墳の須恵器資料を検討する。薄井原古墳出土の須恵器は、出雲須恵器編年において重要な資料として認識されてきた。とくに前方部くびれ部出土の須恵器は、早くからTK10型式併行段階に位置づけられてきた(渡邊ほか1991)。その後、大谷氏も薄井原古墳前方部くびれ部出土須恵器をTK10型式併行(出雲2c期)と捉えている(以下、大谷編年)。この大谷編年は、須恵器製品の各部位の形態を細分化し、そのセリエーションを明らかにした上で、馬具や金工品の編年成果を援用して、畿内との併行関係にも言及しており、出雲の到達点的須恵器編年として有効である。本稿でも大谷編年に依拠しているが、若干の私見を述べることにする。

薄井原古墳の築造年代の上限を検討する上で、重要な須恵器資料は、前方部くびれ部出土の蓋坏である(図5-1・4)。口径が15cmを超える大型品である。坏蓋口縁部端には段状のアクセントが明瞭であるが(「 $\alpha$ 2類」)、坏身の口縁部内側にはそれが入らないことから、TK10型式併行期の範疇で問題のない資料といえる。また、薄井原古墳の石室祖型となる勝福寺古墳・物集女車塚古墳・井ノ内稲荷山古墳は、いずれもTK10型式併行期の築造であることから、傍証的にTK10型式期に収まる資料とみなすことが可能である。さて、ここで問題になるのが、TK10型式段階の評価である。田辺昭三はTK10型式とTK43型式との間をつなぐ資料として陶器山85号窯出土資料提示して、TK10型式を細分する構想を発表している(田辺1981)。これを踏まえ、畿内の資料からTK10古段階と新段階に二分する案が出されており、勝福寺古墳をTK10型式古段階、物集女車塚古墳・井ノ内稲荷塚古墳をTK10型式新段階と評価されている(石井2007)。あくまでも、畿内資料での評価であるが、大谷氏がMT15型式からTK10型式併行期に相当する出雲2期を、蓋坏の形態から3つに区分している編年案(出雲2期A・2期B・2期C)と、接点がないのであろうか。もちろん、出雲における出雲2期の資料は少ない上、器種構成も蓋坏と甕のみである。ここで畿内の甕編年を参照

すれば(吉田2007)、出雲2期の甕2例(伝宇牟加比売御陵古墳・金崎9号墳=出雲2B期)の文様構成はいずれも1段型にあたり、TK10型式古段階に盛行するものである。すなわち、甕1段型を共伴する出雲2B期はTK10古段階と考えることも可能である。薄井原古墳は墳丘出土の蓋坏が出雲2C期であるが、薄井原古墳第二号石室出土の脚付短頸壺を参考にすれば(図5-14)、その脚部は甕の口縁・口頸部の造形を転用したような形態で、文様構成上は甕2段型に相当する。甕2段型はTK10新段階に出現し、TK43型式期の前葉まで消長することから(前掲吉田)、出雲2B期に後出する出雲2C期はTK10新段階と考え位置づけることもやぶさかではない。このように仮定すれば、薄井原古墳の築造はTK10型式併行期新相段階にあるものと考え得る。そして、第二号石室への副葬行為の上限は先述の脚付短頸壺とその蓋の形態を参考にすれば、TK10型式併行期新相段階~TK43型式併行期古相段階に相当しよう。一方で、第一号石室出土の須恵器蓋坏は、TK43型式併行期でも第二号石室出土の須恵器より新しい様相を示していること、羨道部床面に密着して、一括性の高い蓋坏3セットのうち、図5-10・11が最も新しい要素のある資料であることから、ある段階の副葬行為(初葬・追葬かは不明)については、この蓋坏を標識とした場合、TK43型式併行期新相段階と位置づけることができる。

## 3) 土師器(図6-2~9)

図6-2の土師器高坏は、復元口径23cmの大型品である。口縁端部はやや外反する。図6-3~9は、くびれ部から出土した赤彩の土師器高坏の脚部である。図6-7・9は脚部内面の坏接合部分には、掘じりを加えた痕跡が観取できる。全体の形状は不明ながらも、土師器高坏が複数出土していることは重要である。TK23-47型式併行期~TK10型式併行期まで、出雲東部では古墳の墳丘裾、周溝、くびれ部に、土師器(高坏)を供える例が多数認められる。このことは、薄井原古墳築造の年代観とも整合的である。

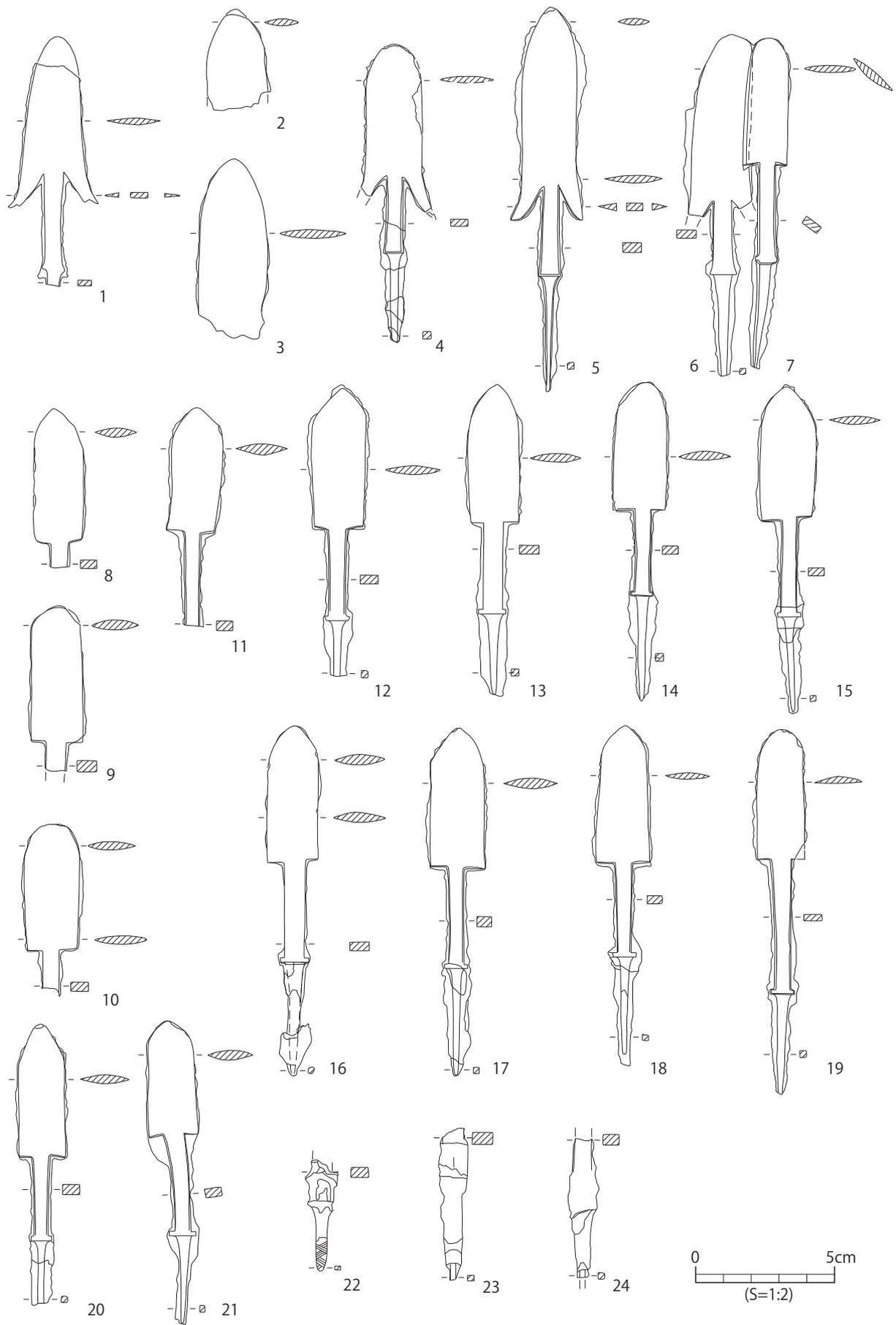


図7 薄井原古墳出土資料（3）

#### 4) 出土鉄鏃とその評価 (図4・7)

薄井原古墳第二号石室の石棺内からは、20本程度の平根鏃が出土している。後述するように、盗掘の可能性は少なく、石棺内にある程度まとまっている出土状況と齊一的な形態の特徴から、一括で副葬された一群とみなすことができる (図9参照)。また、興味深い点は明らかに長頸鏃と同定できる鉄鏃は出土していない。なお、既刊報告書の出土状況図には鉄鏃の番号が付されている。しかし、収蔵資料の鉄鏃にはその番号に係る情報が付されておらず、同定できる資料は、既刊報告書に実測図が掲載されている鉄鏃7点でしかない。これについては、第3章で少し触れる。ところで、図7-3は既刊報告書では「鏃身様鉄器」と報告されているもので、石棺外からの出土である。やや大型の平根鉄鏃の可能性も考えられたため、他の鉄鏃との法量を整理し (表2参照)、比較検討した。その結果、他の鉄鏃に比べて

身部長が広く、身部長も3.0cmあることから、槍先、あるいは小ぶりの短剣等の可能性が考えられる。

なお、柳葉腸抉式A類・B類の身部長が0.2cmであるのに対し、C類 (三角形式) は身部長0.3cm前後とやや厚みがあるのも、法量的な特徴である。

後期の平根鉄鏃については、その出土古墳の分布域が限定的な傾向を示す場合があることから、地域性の顕在化 (杉山1998、尾上1993・1995、水野1995など) と、在地での生産と流通が指摘されている (尾上1993・1995)。まず、上記3形式の副葬組成を重視する観点に立ち、検討を進めてみよう。これら三つの形式のうち、柳葉腸抉式B類や三角形式は、TK43型式併行期以降に列島各地で広域に分布することから (前掲杉山、前掲尾上1993・1995)、この形式のみでは出雲に限定される地域性と評価することはできない。しかし、柳葉腸抉式A類は山陰からの出土は知られておらず、山陰では特殊な鉄鏃の範

【表2】鉄鏃法量表 (cm) ※ ( ) は欠失のため残存長

図版番号	類型	全長	身部長	身部長	身部長	頸部長	茎部長
図7-1	A類	(12.4)	(3.8)	2.3	0.25	3.6	(5.0)
図7-2	A or B類	(3.4)	(3.4)	2.1	0.25	—	—
図7-3	槍先か?	(5.7)	(5.7)	2.5	0.3	—	—
図7-4	B類	(10.8)	4.9	2.1	0.2	2.8	(3.1)
図7-5	B類	14.0	6.4	2.0	0.2	3.3	4.3
図7-6	A類か	12.3	6.0	2.1	0.2	2.6	3.7
図7-7	C類	11.9	4.6	2.1	0.3	3.6	3.7
図7-8	C類	(5.8)	4.85	1.8	0.35	(0.95)	—
図7-9	C類	(5.9)	5.0	1.85	0.35	(0.9)	—
図7-10	C類	(6.2)	4.6	1.85	0.3	(1.6)	—
図7-11	C類	(7.9)	4.6	1.75	0.4	(3.3)	—
図7-12	C類	(10.45)	5.2	1.9	0.3	3.35	(1.9)
図7-13	C類	11.2	5.0	1.8	0.3	3.3	2.9
図7-14	C類	(11.5)	4.6	1.8	0.3	3.1	3.8
図7-15	C類	11.8	4.7	1.8	0.3	3.6	3.5
図7-16	C類	12.7	4.8	1.8	0.35	3.7	4.2
図7-17	C類	12.6	5.1	2.0	0.3	3.6	3.9
図7-18	C類	11.9	5.0	1.9	0.2	3.5	3.4
図7-19	C類	13.3	4.8	1.9	0.3	4.9	3.6
図7-20	C類	(10.2)	(4.1)	1.7	0.3	3.1	(3.0)
図7-21	C類	11.0	4.2	1.8	0.35	3.7	3.1
図7-22	—	(4.0)	—	—	—	(0.4)	3.5
図7-23	—	(5.5)	—	—	—	(2.3)	(3.2)
図7-24	—	(5.0)	—	—	—	(1.4)	(3.6)

平根鉄鏃は次の三つに分類できる (図4・図7)。

柳葉腸抉式A類…通有の柳葉腸抉式で、逆刺の先端が二段になっているもの。

図7-1の鏃身長 (身部長+頸部長) は復元で8.5cm×1~3点。台形関。

柳葉腸抉式B類…通有の柳葉腸抉式で、鏃身長7.5~9.8cm程度×2~3点。台形関。

三角形式 (C類)…平面形が五角形にちかい三角形を呈したものの。やや細長いのが特徴。

鏃身長7.8~8.8cm×15点。棘関

疇に入れて差し支えなからう。この仮説を検証する上で、薄井原古墳の石室・石棺と類似する物集女車塚古墳をはじめとする摂津・山城地域（猪名川水系と淀川水系）の後期古墳出土鉄鏃の比較検討は重要である。

結論を急げば、物集車塚古墳出土鉄鏃との比較は後述するとして、南塚類型・勝福寺型の横穴式石室墳出土鉄鏃の形式とそのセット関係に、極めて有意な類似性が認められたのである<sup>(13)</sup>。

さらに、五角形にちかい三角形式の鉄鏃は、南塚系統の石室墳である摂津国川辺郡の勝福寺古墳からも出土している。勝福寺古墳はTK10型式古段階に位置づけられているが、三角形式の鉄鏃は棘状関がみられず、TK10形式新段階の井ノ内稲荷山古墳出土例より古相を呈しているといえる<sup>(14)</sup>。

また、両古墳出土の長頸鏃が類似していることも興味深い。その長頸鏃は鏃身部が三角形式で、僅かながら腸袂が入るものである。本稿では、これを「鏃身三角形の長頸鏃」と呼称することにする。勝福寺古墳の長頸鏃は台形関であるが、井ノ内稲荷山古墳は台形関から棘状関への移行期を示すものである。この形式の長頸鏃は、井ノ内稲荷山古墳から南に約1kmの長法寺七ツ塚古墳群（3号墳1号埋葬施設と4号墳1・2号埋葬施設）[京都府向日市]からも出土しており、摂津・山背地域（猪名川・淀川水系）で広く流通していたものと考えられる。出雲では、薄井原古墳から直線で西に約5km離れた島根郡法吉郷に所在するTK10型式古相～新相段階の須恵器が造出しに複数個供えられた伝宇牟加比売命御陵古墳から出土している。さらに本稿で分類した薄井原古墳出土の柳葉腸袂式A類と柳葉腸袂式B類に類似した平根鏃は、淀川水系での集中的分布（地域性）を形成するもので、淀川流域に限定される在地生産品の可能性が指摘されている（豊島2005）<sup>(15)</sup>。

まとめると、前記した3つの形式の平根鉄鏃「柳葉腸袂式A類・B類・三角形式」と「鏃身三角形の長頸鏃」は、淀川水系あるいは猪名川水系と出雲で流通した（地域性を形成した）鉄鏃形式と考えられる。すなわち、ここで流通する鉄鏃が、現象として

は特殊な長頸鏃と同じく、広域流通品として遠隔地である出雲にも、継体朝期に畿内系石室と組合式石棺の情報と共にもたらされた可能性が考えられるのである<sup>(16)</sup>。付言すれば、薄井原古墳出土の平根鏃は猪名川・淀川水系からの広域流通品、もしくはそれをモデルとした出雲での在地生産品であった可能性も十分に考えられる。

ところで、A類・B類は短頸腸袂柳葉形鉄鏃に分類でき、台形関という京都府北部～山陰地域に共通する地域的特徴の可能性が指摘されているが（土屋2018）、薄井原古墳出土例のA類（図7-1）は棘状関を呈している。広域的な共通性から遊離する特殊性を備えている可能性も考えられる。また、TK43型式の須恵器を副葬する九州北部系の初期横穴式石室墳（腰石を縦にして用いるもの）である田和山1号墳には多様な形式の鉄鏃が副葬されている。このうち出土した平根鉄鏃の中には、薄井原古墳出土の柳葉腸袂式B類と同形式の資料と、継体大王の政治的基盤である淀川水系南岸に所在する宇山1号墳[大阪府枚方市]<sup>(17)</sup>出土資料に類似する資料、そして、古代山陰道の経由地に所在する池の奥5号墳[京都府福知山市]に類似したものが含まれている点も重要である<sup>(18)</sup>。

ところで、物集女車塚古墳には長頸鏃のみが副葬されており、平根鏃による出雲との直接的比較は叶わなかった。しかし物集女車塚古墳出土の長頸鏃には、ヤマト王権からの広域流通品として各地の有力首長に配布された特殊な長頸鏃（豊島2002・2005）に加え、後期後半に東西出雲全域で広く流通することが指摘されている「鏃身の長い直角関柳葉式長頸鏃」（大谷1999）<sup>(19)</sup>、と同形式の鉄鏃が主体である点は、注目すべきである。すなわち、継体朝期から欽明朝期において、摂津・山背から出雲にもたらされた上述の広域流通品としての平根鏃と鏃身の長い柳葉長頸鏃もまた、出雲における在地生産品のモデルとして採用された可能性が考えられる<sup>(20)</sup>。

##### 5) その他の資料について（図8）

第一号石室からは、石室内に流れ込んだ土中から耳環（図8-9）が出土している。また、薄井原古

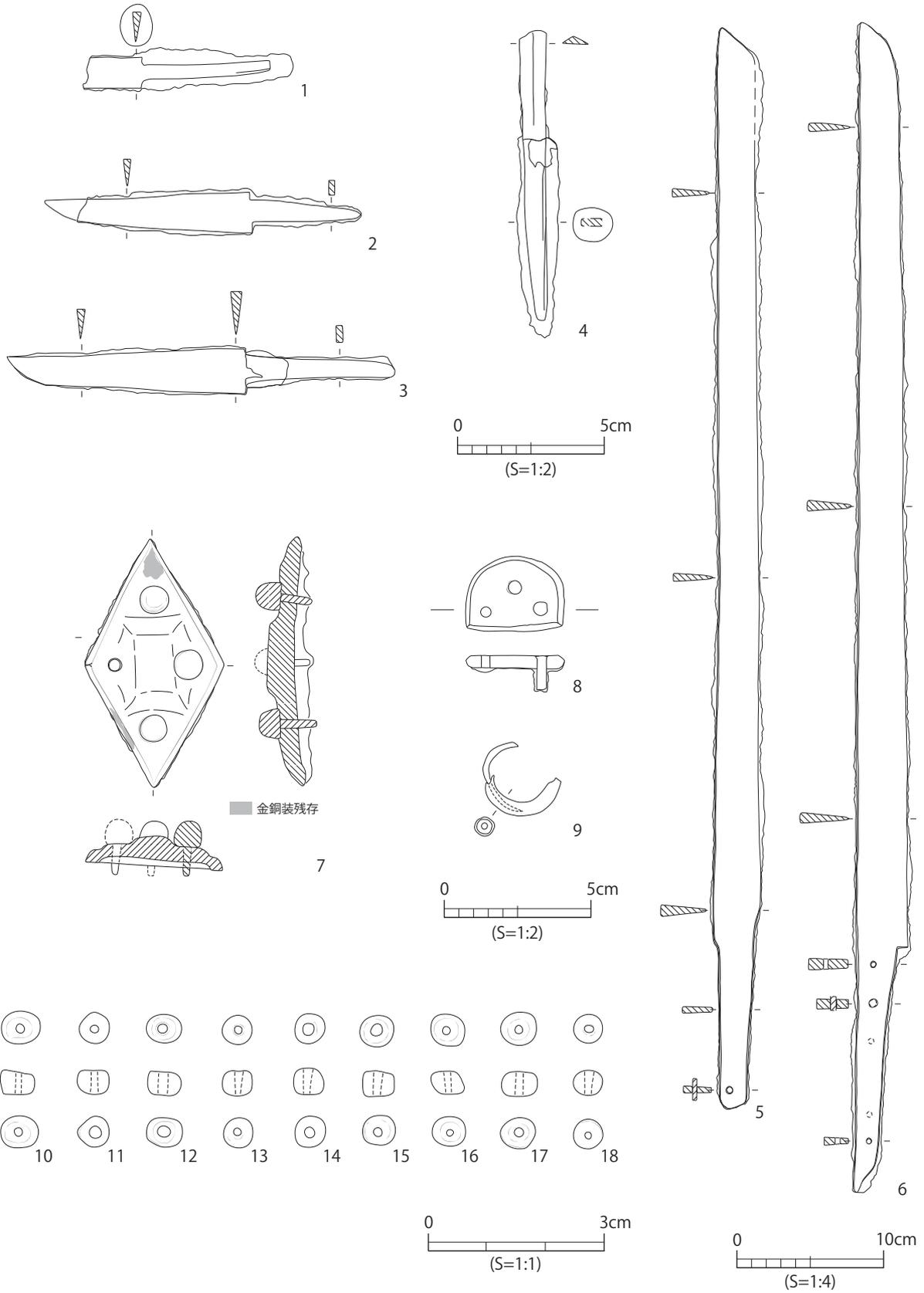


图8 薄井原古墳出土資料(4)

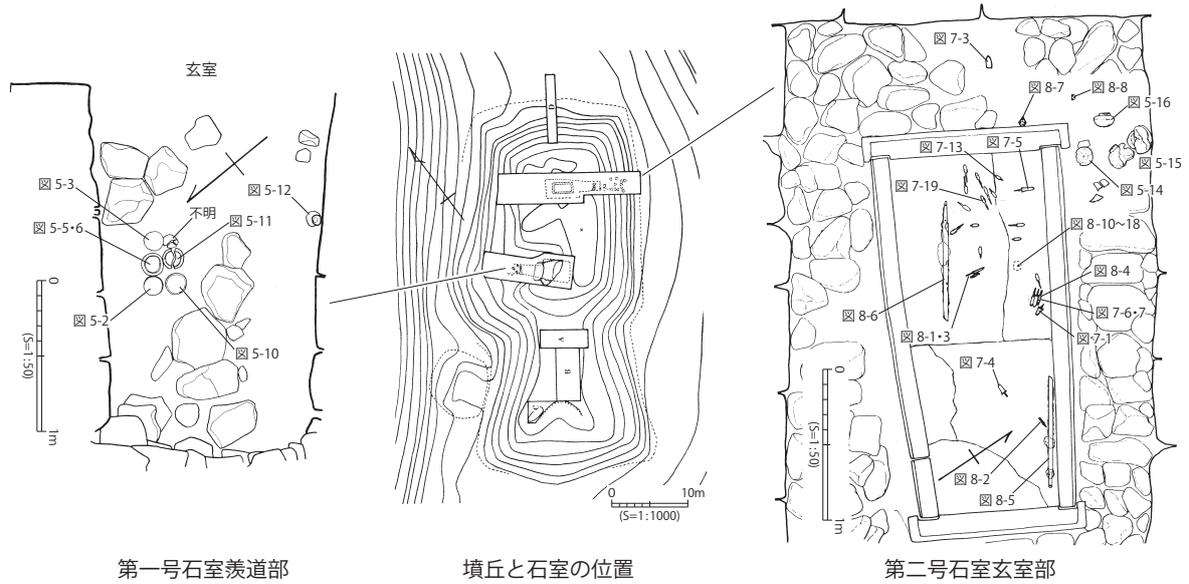


図9 薄井原古墳遺物出土状況

墳第二号石室の石棺内からは、先に記した鍔身様鉄器(図7-3のみ石棺外)のほか、刀子(図8-1~3)、鉈(図8-4)、鉄刀(図8-5・6)、ガラス小玉(図8-10~18)が出土している。なお、馬具(図8-7・8)は、石棺外北小口と奥壁の間から出土している。これらは、盗掘・攪乱を免れた資料群である。石棺内の資料群は、蓋石の一部破損により土砂が流入していたようだが、ほぼ原位置を反映しているものと考えられる。

図8-1の刃身は欠失しているが、最大幅9.5cm、両関の中茎の長さは4.3cmである。柄には鹿角が残存する。図8-2は切先が欠失しているが、刃身の復元長7.0cm(残存長6.0cm)、最大幅1.4cm、両関の中茎の長さは3.3cmである。合口部分で長径1.5cm、短径0.9cmの断面楕円形した鹿角の柄であったことがわかる。図8-3は完形品で、全長13.2cm(刀身8.2cm・中茎5.0cm)、刀身の最大幅1.5cmの両関である。柄には木質が残存する。なお、中茎の目釘孔はX線撮影でも確認できなかった。図8-4の鉈は、残存全長9.0cm、身は約3.8cmあり、身の幅8~9.2mm、厚さ2.4mm程度で断面形は扁平な三角形を呈している。下面が平らで、上面はやや丸みを帯びている。柄は木製で、長径1.4cm、短径(復元で)1.1cmの幾分面取りをした楕円形を呈している。図8-5の鉄

刀は、石棺内東小口側で、切先を西小口に向けた全長74cm、刃幅は最大3.2cm、切先は直線的な直刀である。刀身から中茎にかけては歪な両関となっており、茎の端部は直線的な隅尻である。直径4mmの目釘孔に目釘が残っている。木質の残存はない。図8-6の鉄刀は、石棺内の北側の側石に沿って出土したもので、切先を東小口側に向ける全長80.4cm(刀身64.4cm)、刃幅は最大3.4cm、ふくら切先の直刀である。形制は片関で、中茎の端部は緩やかな挟りが入っている。中茎の目釘孔は確実に三つあり(エックス線撮影の所見では、他に二つの可能性)、一つには目釘が残っている。木質は残存しない。

図8-9は金銅装の銅製耳環と考えられる。中実である可能性が高いが、内部の腐食が著しく、間隙も生じており詳細は不明である。直径5mmの銅を外径3cm程度の輪にしたものと考えられる。なお、表面に金銅装の痕跡は残っていない。

図8-7の馬具(金銅装菱形飾金具)は、その大きさから単なる辻金具等ではなく、馬の額飾の可能性が考えられる<sup>(21)</sup>。8.5cm×4.2cm×1.1cm、4箇所直径9mm、高さ7~9mmの鉾が打たれているが、一つは欠失している。表面と側面に金銅装の痕跡が僅かに残っている。中央部には下辺で3.3cm×2.2cm、上辺で2.0cm×1.2cm程度の長方形様の浮き出しが施

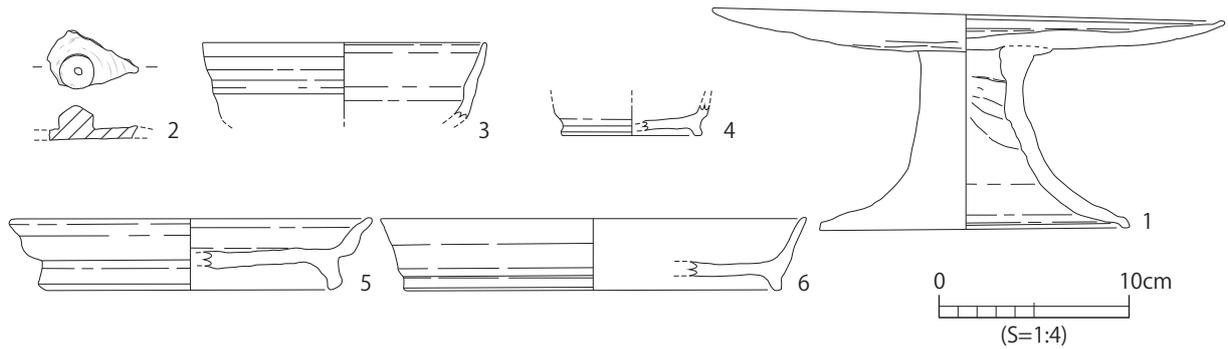


図10 納佐出土品

されているものと考えられるが、既刊報告書段階よりも歪な変形が生じているようで、浮き出しの正確な形態は判然としない。本稿の実測図は、補正して図化を試みたものである。

図8-8の馬具（鉄地金銅張の半円形飾金具）は、3.4cm×2.6cmで、3個所に直径4mmの頭部が扁平な鉾が打ちこまれているが、一つは欠失している。金銅板は、裏側で幅2mmまで折り返されており、皺が生じている。図8-7・8の類例としては、TK10型式併行期の畿内系石室墳（右片袖）・静岡県浜松市（旧浜北市）の興覚寺後古墳（下津谷ほか1988）出土の馬具がある。

図8-10~18は濃青色を呈するガラス小玉である。図8-10は短径5.5×長径6.0×厚み4.2mm、同じく11は5.0×5.5×4.0mm、12は4.8×6.0×4.0mm、13は5.0×5.0×4.0mm、14は5.0×5.5×4.0mm、15は5.5×5.0×4.1mm、16は5.8×5.5×4.0mm、17は6.0×5.5×4.0mm、18は4.8×5.0×4.0mmで、いずれも端面の研磨はなく、気泡のあり方から、「引き伸ばし法」（大賀2002）で製作されたものと考えられる。

### 3. 考察 - 薄井原古墳の特質 -

最後にまとめとして、出土資料の評価から、3つの論点に絞って薄井原古墳の歴史的な位置づけに言及したい。

#### 1) 薄井原古墳の築造（完成）時期について

薄井原古墳の築造（完成）時期については、くびれ部出土の須恵器蓋坏の1セットが指標になる。すなわち、①出土資料群中で最も古い様相を示すTK

10型式新相段階と位置づけられる須恵器であること、②その出土位置が古墳祭祀（須恵器供献）の可能性が想定される「くびれ部出土」ということである。これらを踏まえるならば、薄井原古墳の築造完成時期はTK10型式併行期新相段階に遡るものと結論される。

#### 2) 第二号石室における石棺内遺物出土状況と被葬者について（図9）

第二号石室の石棺内には、鉄刀2、鉄鏃20、刀子3、鉈1、ガラス小玉9が出土している。土砂流入の攪乱を受けているとはいえ、品目毎にある程度のまとまりが観取できる。なお、既刊報告書によると盗掘は奥壁と石棺の間であったと想定されている。

まず、鉄刀2は、石棺内でほぼ原位置を保ったものと考えられる。石棺は西小口側の幅が広いことから、頭位は西小口と判断される。すなわち、石棺の内法が長さ2.37m、西小口（奥壁側）が1.0m、東小口（羨道側）が0.8mであることから、成人1名用の棺として用意されたものと考えられる。単葬と仮定し、被葬者が頭を西小口に向けて仰臥したと想定すれば、被葬者の左脚に沿って図8-5が、同じく右側（右腕）に沿って図8-6が、それぞれ切先を内側に向け合うように副葬されたことになる。付言すれば、それぞれの鉄刀は、刃を石棺側壁側に向けていることも注目される。同じく、鉄鏃は石棺内の西小口側で集中しており、特殊な形式の鉄鏃A類（図7-1・6）のみ、被葬者の左腕付近で、鏃身先端を足側に向けて出土していることも興味深い。また、ガラス小玉もまとめて被葬者の左胸あたり

で出土しているようにも見受けられる<sup>(22)</sup>。なお、年代観の目安となる鉄鏃には棘関があることから、石棺への埋葬は古く見積もってTK43型式併行期古相段階に位置づけられる。このことは先に検討した、石室内出土の須恵器とほぼ同様の年代観である。

### 3) 副葬行為の時期差から派生する一・二の問題について

次に、薄井原古墳の両石室の副葬行為の時期差を検討する。ただし、薄井原古墳の両石室は、盗掘等の攪乱を受けているため、厳密に初葬・追葬を検討することは不可能である。ここでは、現状で得られている既刊報告書の報文と出土資料から、両石室の副葬行為の時期差を相対的に俯瞰してみたい。前章で検討したように、薄井原古墳の両石室への副葬行為は、第二号石室がTK10型式併行期新相～TK43型式併行期古相段階を上限に、第一号石室はTK43型式併行期新相段階に行われたと考えられる。今のところ第一号石室からは、TK10型式（新相）併行期の資料が確認されていないので、第二号石室への副葬行為が第一号石室の副葬行為に先行すると仮定して行論する。このように副葬行為の時期差があるとすれば、被葬者の埋葬（死亡）に時間差があった可能性が浮上する。なお、後方部に二つの石室を設ける企画は墳丘築造前からあった公算が高く、横穴式石室の型式が被葬者の活躍時期を示すとした見解（岸本2011）に鑑みれば、二つの石室の被葬者（初葬）は同時代を生きた人物であった可能性も浮上する。その上で、二つの石室を比べた時、第二号石室と第一号石室の違いは明確である。例えば第二号石室が第一号石室より畿内的であること（畿内的な組合式石棺、第一号石室に比べて、明らかな腰石と呼べる用石が見られない点等）、一方、第一号石室は第二号石室と同じ畿内系石室であるが、第二号石室に比べて玄室長が短く、玄室長・幅比の指数（以下、指数）も1.5（第二号石室のそれは1.9）と、「南塚・勝福寺類型」の指数2.0の規範から隔たりが生じている。また、明確な腰石の用石があり、九州北部的な特徴も顕著である。このことは、石室設計段階において第二号石室と第一号石室の間で情報の新古が

生じている可能性と、石室・石棺（埋葬施設）の設計・意匠に被葬者の出自、同族関係（和田1998）、通交先が反映されている可能性、あるいは両者がその背景になっている可能性が想定される。例えば、第二号石室の指数1.9から第一号石室の指数1.5への変化を石室設計・施工段階の時間差と認定するのか、被葬者の通交先との情報による設計・意匠の改変結果と認定するのか、現状では容易に決することはできない。ただし、両石室が攪乱を受けているという資料上の制約はあるものの、第二号石室への副葬行為が第一号石室のそれに先行する可能性と、第一号石室に比べて、畿内的な石室の規範（玄室比）がより鮮明な第二号石室に、摂津・山背系の石棺採用と、摂津・山背系の鉄鏃が副葬されていることを積極的に評価すれば、薄井原古墳の中心的被葬者に第二号石室に葬られた石棺の人物を想定することは、全く根拠のないことではない。反対に、第二号石室の被葬者に比べて畿内との通交関係が薄く、九州北部との通交関係がより強いとみなされる第一号石室の被葬者（初葬）は、TK43型式併行期新相段階以降に出雲東部で通有の在地的な家形石棺（角田2004）に葬られている。このことから、第一号石室の家形石棺に葬られたと想定される初葬の被葬者は、第二号石室の石棺に葬られた被葬者より若年の人物、もしくは埋葬（死亡）時期が後であった可能性が想定されるのである。このような二つの石室・石棺の個性と、その被葬者たちの関係性を検討する上でも、今後一層の石室・石棺研究の深化が期待される。

### おわりに

以上、薄井原古墳の出土資料から、薄井原古墳の築造時期と、墳丘築造段階に後方部に企画された公算の高い二基の畿内系石室について考察を進め、薄井原古墳の被葬者像に言及してきた。個別の資料については、地域と広域の両面から俯瞰的に分析を進めて行く必要があるものと思量するが、資料分析の着眼点や比較資料の抽出方針、それらを用いた立論は無数にあり、継体朝の画期として、薄井原古墳の築造を評価する本稿の行論も仮説の域を出ないもの

である。

また、鉄鏃をはじめとする薄井原古墳の関連古墳(松江市奥才古墳群1号墳、田和山1号墳、林43号墳等)出土の鉄器についても、紙幅の都合上、図示できなかった資料もあるので、改めて別の機会に論じることを思念して、擱筆したい。

## 謝 辞

本稿を成すにあたって、下記の方々大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。

赤澤秀則、池淵俊一、岩崎孝平、岩本真美、岡崎雄二郎、角田徳幸、勝部 昭、佐藤 功、田中 大、丹羽野 裕、花谷 浩、原田敏照、深田 浩、吉松優希(五十音順)

## 註

- (1) 本稿は2015年度～2018年度に行われたテーマ研究「国家形成期の首長権と地域社会構造」(島根県古代文化センター事業)において実施した資料調査(図5～8・10)の成果に依拠したものである。
- (2) 山代二子塚古墳の築造を出土須恵器からTK10型式に位置づける見解が提示されている(大谷1996)。ただし出雲型手持壺の型式学的研究からは、TK10～TK43型式初期に想定されている(池淵2004)。TK10型式新相～TK43型式の初期併行期の幅を持たせておく。
- (3) 古曾志大塚1号墳と丹花庵古墳は、応神陵古墳の築造と畿内のB種ヨコハケ技法を採用しているが(田中2015)、これは、摂津三島の太田茶臼山古墳の築造時期とほぼ同時期である。太田茶臼山古墳は、允恭天皇陵と同企画の前方後円墳であり(一瀬2005)、大王陵古墳と同一プランである前方後円墳の存在は、ヤマト王権との関係を考える上で、重要といえる(菱田2012)。社部の本来の本拠地とされる秋鹿郡の古曾志に築造された王陵陪塚系統の大型円墳と巨大方墳(仁木2015a)が造営される点では、摂津三島と同じく、古曾志でも古墳時代中期におけるヤマト王権との直接的な通交関係が構築されたとみるべきであろう。
- (4) 薄井原古墳の所在地は、島根郡山口郷に比定でき

るが、この地域には中期後葉の大型円墳の太源1号墳(32m)や前方後円墳の金崎1号墳(32m)も築造されている。しかし、古曾志の中期有力古墳が半径500m程度で凝集するのに対して、半径約2～3km離れなければ薄井原古墳に先立つこれらの有力古墳の築造が見られないことは示唆的である。

- (5) 水はけの悪い湿地(恵曇池(恵曇陂))の排水改良のために、佐陀川河口部に想定される二箇所の岩盤を掘り抜いたとされている(関1995・1997、平野1997)。
- (6) とくに、竹村屯倉をめぐっては、『日本書紀』仁徳即位前記に登場する倭屯田司の意宇宿禰が、その関与にも関わる可能性を否定できないとした前提で、『国造北島氏系譜』に見える意宇足奴命(オウスクネノミコト=『日本書紀』意宇宿禰)の一代前の人物が「三島足奴命」(ミシマノスクネ)であることから、この三島とは竹村屯倉を中心とした三島地域にほかならぬと指摘し、意宇宿禰同様に実在した人物を何らか反映して設定された祖先と考えられている(丹羽野・平石2010)。
- (7) 島根郡における社部臣氏の本貫地については、島根郡家比定地の一つである納佐(松江市東川津)に隣接する「コシヨベ」という門名の家から社部臣氏との関連の可能性を示唆する指摘がある(朝山1953)。
- (8) 島根郡家域の今一つの比定地が、福原町域とそこに所在する芝原遺跡である。芝原遺跡は、300mを超える溝や複数棟の掘立柱建物の遺構が検出され、嶋根郡主張の出雲臣に関わる可能性のある「出雲」・「出雲家」をはじめ、『出雲国風土記』に記される意宇郡・嶋根郡・秋鹿郡を管区とする意宇軍団に関与したであろう「校尉」と記した墨書土器も出土している(松江市1989)。『出雲国風土記』における里程考証と通道踏査からも(服部1984)、島根郡家に関わる官衙施設として最も有力視されている(服部1988)。ただし、納佐は薄井原古墳の所在する坂本町に隣接することから、ここを島根郡家とする見解もある(内田1977)。納佐からは一般的な集落遺跡からはみられないような、奈良時代後期～平安時代初頭の須恵器高坏が出土していることも、この可能性の一つの傍証といえる(図10参考)。また、納佐を望む北側

- の丘陵には、薄井原古墳の次世代以降に比定される後期末の石棺式石室が集中して築造される太田古墳群が存在する（出雲考古学研究会1987）。とくに太田2号墳の石棺式石室は、意宇郡の向山1号墳のそれを反転させた平面プランであることが指摘されており（角田2008）、古墳時代終末期の有力首長墳と考えられる。
- (9) この「太田」という字名は、屯倉関連地名の可能性も考慮すべきである。すなわち、「太田とは広大な田圃のことで、御田の意を含み、屯田に通じ、皇室領地の屯田に所属する耕作部民としての太田部があったとされる「太田」」（茨木市1969）と同じ性格を有した字名であるかもしれない。なお、島根郡の「太田」に所在する北の持田村と南の川津村の村界を条里制の畦と推定し、ここから条里制の復元試算した山本清は、各所の作道と復元条里が整合的に重複していると指摘する（山本1982）。とくに、太田の平野部に西隣する和田からは、日本海側の加賀と恵曇、そして枉北道と佐太・古曾志方面への分岐点となる交通の要衝でもある。
- (10) このような特徴は2019年に発掘調査が行われた初期横穴式石室墳の新例である穴道湖南岸に位置する松江市東津田町の南外5号墳（前方後円墳・約20m・TK10型式併行の須恵器が出土）の墳丘構築過程とも類似している。）
- (11) ここでは鈴木2011に依拠して、畿内の大和・山背・摂津・河内・和泉に分布するものを畿内系石室、それ以外の地域に分布するものを畿内系石室と呼び分けておく。
- (12) 内田氏は、側壁が緩くカーブする点（＝「胴張の側壁」）において、物集女車塚古墳と薄井原古墳第二号石室の平面プランが酷似していること、物集女車塚古墳が古代山陰道の起点に近いことを根拠に、物集女車塚古墳と薄井原古墳との関係を強調している（内田2001）。近年、物集女車塚古墳の「胴張の側壁」は、尾張など東国との関係も考慮する必要性が指摘されている（細川2016）。薄井原古墳の第二号石室は明確な腰石がないため、日本海側各地の導入期横穴式石室にみられる「胴張の側壁」（中司2003）ではない考えも成り立ち、物集女車塚古墳の被葬者（集団）からの直接的な関係性（石室情報の伝播等）も十分に考えることができる。ただ、「胴張の側石」を有する薄井原古墳第一号石室に「腰石」が存在することを考えると、保留すべき点がある。後考を俟ちたい。
- (13) なお、井ノ内稲荷山古墳の出土の五角形にちかい三角形式鉄鏃は身幅が広く、薄井原古墳出土例より古い形態をしたものといえる。また、薄井原古墳出土例より明確ではない棘被が認められるのも、形式的に一段階古い様相を反映している。これは井ノ内稲荷山古墳の初葬の須恵器がTK10型式併行期新相段階に属し、鉄鏃を副葬する薄井原古墳第二号石室出土の須恵器が、TK43型式併行期古相段階に位置づけられることと、矛盾しない。
- (14) 後期平根鉄鏃の編年研究においては、MT85型式期（本稿におけるTK10型式併行期新相段階に対応すると理解しておく）に棘状関の鉄鏃が認められるため、鉄鏃の画期と須恵器の編年が厳密には対応しない可能性を認めつつ、共通の時間軸を設定する立場から、TK10型式期とTK43型式期の間に画期を設定した豊島氏の見解に従う（豊島2003）。棘状関はTK10型式併行期新相段階では、まだ少数派と考えられるが、TK10型式併行期新相段階（MT85型式）に比定される須恵器が出土している島根半島西部・出雲郡美談郷所在の上島古墳からは、棘状関の明瞭な柳葉式の長頸鏃が40本出土している（花谷2008）。
- (15) 薄井原古墳出土例は、鏃身形態の類似性は高いが、頸部が短く棘状関となっていることから、後出的な資料として位置づけられる。
- (16) 古墳時代中期における中央と地方、あるいは特定の地域間で顕在化した集団・出自・通交関係の明示として機能する鉄鏃の象徴性（鈴木2000・2003a・2003b）は、古墳時代後期段階にも継続していたであろう。
- (17) TK209型式併行の須恵器を副葬する古墳であり、新形式の長頸鏃が主体ながら、TK43型式の特徴を有する平根鉄鏃も含まれている。
- (18) 三角形式の平根鉄鏃は、山陰道の但馬・丹波で多数出土することが指摘されているが（土屋2014）、そ

の故知は摂津・山背にあった可能性が高い。なお、ここでは指摘するにとどめるが、土屋氏が地域生産の可能性を指摘する鏃身に段状関や逆棘が施された三角式鉄鏃が宇山1号墳と田和山1号墳で出土していることから、淀川水系と山陰（但馬・出雲）の親密な繋がりを類推する上で重要な資料と考えられる。

(19) ただし、出雲においては、当該時期にナデ関等、直角関が明瞭では無い資料も確認されている。直角関かナデ関に関わらず、鏃身の長い柳葉の長頸鏃は畿内の形制に倣った東西出雲の地域性として、捉えるべきであろう。

(20) TK43型式併行期の御崎山1号墳出土の平根鏃に、柳葉腸扶式B類のものと、長法寺七ツ塚古墳群2号墳出土の圭頭式鉄鏃に類似するものが含まれる。このことは、そのモデル（広域流通品）の故地が同所にあったことを暗示する。

(21) 花谷浩氏のご教示による。

(22) 古墳時代後期における出雲東部の上位層の古墳に副葬される玉類の組成は、畿内の上位階層で石製玉類の使用が衰退すること（大賀2013）に同調する可能性が指摘されている（井谷2016）。このことは、上位層の薄井原古墳の石室・石棺・鉄鏃が、畿内と密接に関係することと整合的である。

#### 【引用・参考文献】

- 赤澤秀則2002「小結」『奥才古墳群第8支群』鹿島町教育委員会
- 秋山浩三1988「組合せ式家形石棺」『物集女車塚』（向日市埋蔵文化財調査報告書 第23集）
- 朝山 皓1953「出雲国風土記に於ける地理上の諸問題」『出雲國風土記の研究』
- 荒井秀規2009「領域区画としての国・評（郡）・里（郷）の成立」『古代地方行政単位の成立と在地社会』奈良文化財研究所
- 池淵俊一2004「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集-河瀬正利先生退官記念論文集-』広島大学大学院文学研究科文化財学研究室
- 出雲考古学研究会編1987「石棺式石室の研究」『古代の出雲を考える』6 出雲考古学研究会

井谷朋子2016「出雲における後期古墳出土玉類からみた地域性と階層性」『古代文化研究』第24号 島根県古代文化センター

一瀬和夫2005『大王墓と前方後円墳』吉川弘文館

茨木市教育委員会1988『わがまち茨木 地名編』

岩本真美2016「第1節 出土須恵器からみた魚見塚古墳・東淵寺古墳の年代的位置づけ」『魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書-松江市東部における古墳の調査(2)-』(風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書23) 島根県教育委員会)

内田律雄1977「手染郷からみた島根郡家とその位置」『八雲立つ風土記の丘』24号

内田律雄1997『出雲国風土記』島根郡条の「社部石臣」について』『古代文化研究』5

内田律雄2001『出雲国風土記』嶋根郡条の社部臣について』『青山考古』第18号（田村晃一先生退休記念号）青山考古学会

梅本康広2007「畿内型横穴式石室の構造」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会

大賀克彦2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』（清水町埋蔵文化財発掘調査報告書V）

大賀克彦2013「③玉類」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社

大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会

大谷晃二1996『御崎山古墳の研究』（八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ）島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘

大谷晃二1999「上塩冶築山古墳をめぐる諸問題」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター

岡野慶隆1991「畿内における初期横穴式石室の一形式-勝福寺古墳北墳・雲雀丘C北4号墳の位置づけ-」『関西学院考古』第9号

小田富士雄1980「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座』第4巻 学生社

川原和人1980「島根県岡田山1号墳の横穴式石室について」『古代文化談叢』第7集 九州古文化研究会

山本 清1982「第2章 古代」『川津郷土誌』川津郷土

- 誌編集委員会
- 尾上元規1993「古墳時代鉄鏃の地域性－長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として－」『考古学研究』考古学研究会
- 尾上元規1995「古墳時代後期における鉄鏃の地域性形成について－岡山県南部を例としてみた鉄器生産の画期－」『古代吉備』第17集 古代吉備研究会
- 角田徳幸1995「出雲の後期古墳文化と九州」『風土記の考古学③』『出雲国風土記』の巻』同成社
- 角田2004「山陰地域の家系石棺」『大王のひつぎ海を渡る－宇土馬門石製家形石棺の謎－』第7回九州前方後円墳研究会・第1回石棺文化研究会
- 角田徳幸2009「山陰・北陸の九州系横穴式石室」『考古学ジャーナル』583
- 角田徳幸2007「山陰における九州系横穴式石室の様相」(杉井健 編『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会2007年度熊本大会分科会Ⅰ記録集 北九州中国書店)
- 角田徳幸2008「出雲の石棺式石室」(土生田純之 編『古墳時代の実像』吉川弘文館)
- 加藤義成1964『出雲国風土記参究』至文堂
- 岸本直文2011「横穴式石室の型式は被葬者の活躍時期を示す」『考古学研究』第58巻第1号
- 小林孝秀「「腰石」をもつ横穴式石室の様相－東日本を中心として－」『山梨県考古学協会2018年度研究集会 横穴式石室と用石技法 資料集』山梨県考古学協会
- 佐伯有清1981『新撰姓氏録の研究』考證篇、吉川弘文館
- 下津谷達男ほか1988『浜北市北麗の古墳群』浜北市教育委員会
- 杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第8集 吉川弘文館
- 鈴木一有2000「交易される鉄鏃」『表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会
- 鈴木一有2003a「中期古墳における副葬鏃の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集
- 鈴木一有2003b「二段逆刺鏃の象徴性」『静岡県考古学研究』No.35
- 鈴木一有2011「横穴式石室」『古墳時代の考古学③ 墳墓構造と葬送祭祀』同成社
- 関 和彦1995「古代の池と堤」『出雲古代史研究－恵曇池・陂をめぐる－』第五号 出雲古代史研究会
- 関 和彦1997a「社部氏の基礎的研究」『出雲国風土記の研究Ⅰ 秋鹿郡恵曇郷調査報告書』(島根県古代文化センター調査研究報告書1)
- 関 和彦1997b「二つの『イヌ』郷と多久国」『古代出雲世界の思想と実像』大社文化事業団
- 高橋克壽2008「特輯『王陵系埴輪の波及と展開』に寄せて」『古代文化』第59巻第4号 古代学協会
- 高松雅文2007a「継体大王期の政治的連携に関する考古学的研究」『ヒストリア』第205号
- 高松雅文2007b「振り環頭大刀と古墳時代後期の政治的動向」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第4冊
- 高田寛太2019「古墳時代中期における中国・四国地域の堅穴式石室・堅穴系横口式石室・木槨～朝鮮半島東南部との比較を通して～」『中期古墳研究の現状と課題Ⅲ』中国四国前方後円墳研究会 第22回研究集会 発表要旨集・資料集成
- 田中 大2015「出雲地域における中期円筒埴輪の時間的位置づけ」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』(島根県古代文化センター研究論集第14集)、島根県古代文化センター
- 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
- 土屋隆史2018「4 古天神古墳出土鉄鏃の位置づけ」『古天神古墳の研究』(島根大学考古学研究室調査報告第17冊)
- 富山直人2007「後期前方後円墳の消長と横穴式石室からみた6世紀の社会」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会
- 豊島直博2002「後期古墳出土の鉄鏃の地域性と階層性」『文化財論叢』Ⅲ奈良文化財研究所
- 豊島直博2005「武器・武具からみた井ノ内稲荷塚古墳・物集女車塚古墳の被葬者像」『井ノ内稲荷塚古墳の研究－大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊－』
- 中司照世2003「第2節 大飯神社1号墳の提起する問題」『滝見古墳群・大飯神社古墳群・山田古墳群・山田中世墓群－近畿自動車道敦賀線建設事業に伴う発

- 掘調査一』(福井県埋蔵文化財調査報告 第75集) 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 中司照世2011「古墳の比較検討から見た古代イヅモの特質」『古代出雲の多面的交流の研究』島根県古代文化センター
- 仁木 聡2014「金崎1号墳の調査履歴」『倭の五王と出雲の豪族 ヤマト王権を支えた出雲』(島根県立古代出雲歴史博物館企画展図録)
- 仁木 聡2015a「巨大方墳の被葬者像」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』(島根県古代文化センター研究論集第14集)、島根県古代文化センター
- 仁木 聡2015b「出雲の豪族とその序列ー古墳副葬の鉄製武器についてー」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』(島根県古代文化センター研究論集第14集)、島根県古代文化センター
- 仁木 聡2016「継体・欽明朝における出雲の池溝開発についてー東西出雲成立の史的画期ー」『塚口義信博士古稀記念 日本古代学論叢』同記念会 和泉書院
- 仁木 聡2019a「『出雲国風土記』神門郡条記載の「池」と大念寺古墳の時代」『大阪府立狭山池博物館研究報告』10 大阪府立狭山池博物館 (初出2017)
- 仁木 聡2019b「継体・欽明朝における出雲の画期」『国家形成期の首長権と地域社会構造』(島根県古代文化センター研究論集 第22集) 島根県古代文化センター
- 丹羽野 裕・平石 充2010「出雲・大井窯跡群の様相と生産体制試論」『古代窯業の基礎研究ー須恵器窯の技術と系譜ー』窯跡研究会
- 服部 旦1984「『出雲国風土記』島根郡家の比定ー千酌駅家湊・千酌駅家の比定と通道の復元を通してー」『山陰史談』21
- 服部 旦1988「『出雲国風土記』島根郡家の比定」『山陰史談』21
- 花谷 浩2007「上島古墳出土遺物」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第17集
- 土生田純之1981「二基の「竪穴式石室」ー横穴式石室の伝播に関連してー」『史泉』第55号 関西大学文学部
- 土生田純之1991『日本横穴式石室の系譜』学生社 (初出1981)
- 菱田哲郎2012「第四節 横穴式石室と6世紀の茨木」『新修 茨木市史』第1巻通史1
- 菱田哲郎2014「古墳時代の社会と豪族」『岩波講座日本歴史 原始古代1』岩波書店
- 平石2004「出雲西部地域の権力構造と物部氏」『古代文化研究』12島根県古代文化センター
- 平野卓治1997「秋鹿郡条本分の検討ー写本からのアプローチー」(以下関1997に同じ)
- 平林章仁1992「土師氏の伝承と儀礼」『日本書紀研究』18 塙書房
- 細川康晴2016「古墳時代の京都」『京都府埋蔵文化財論集』第7集 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 松江市教育委員会1989『芝原遺跡』
- 宮原晋一1988「内部主体」『物集女車塚』(向日市埋蔵文化財調査報告書 第23集)
- 山崎信二1985「横穴式石室構造の地域別比較研究ー中・四国編ー」1984年度文部科学省研究費奨励研究A
- 山本 清・近藤 正1962『薄井原古墳調査報告書』島根県教育委員会
- 山本 清1982「第2章 古代」『川津郷土誌』川津郷土誌編集委員会
- 吉田知史2007「文様と形態からみた後期古墳出土土器の編年」大阪大学文学部研究科考古学研究室
- 柳沢一男1982「竪穴系横口式石室再考ー初期横穴式石室の系譜ー」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻
- 吉井秀夫2002「朝鮮三国時代における墓制の地域制と被葬者集団」『考古学研究』第49巻3号
- 渡邊貞幸ほか1991「出雲」『前方後円墳集成』中国四国編 山川出版社
- 和田晴吾1998「埋葬施設と被葬者像」『季刊考古学』第65号 雄山閣

【遺跡引用文献】(参考・引用文献の重複は除く)

- 井ノ内稲荷塚古墳：大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団編 2005『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学部研究科考古学研究報告第3冊
- 奥才古墳群1号墳：三宅博士・赤澤秀則・廣江耕史ほか

1985『奥才古墳群』鹿島町教育委員会

金崎1号墳：岡崎雄二郎1978『史跡金崎古墳群』松江市教育委員会

興覚寺後古墳：静岡県考古学会2003『静岡県の横穴式石室』

古曾志大谷1号墳：足立克己・丹羽野裕（編）1898『古曾志遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会

古曾志大塚1号墳：丹羽野裕（編）2012『松江市廟所古墳発掘調査報告書（附 古曾志大塚古墳群、平廻古墳）』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター

勝福寺古墳：大阪大学文学部研究科考古学研究室2007『勝福寺古墳の研究』（大阪大学文学研究科考古学研究报告第4冊）

菅田ヶ丘古墳：山本 清1977「島根大学敷地菅田ヶ丘古墳について」『山陰文化研究』第17号

田和山1号墳：中尾秀信1991『田和山古墳群発掘調査概報』松江市教育委員会

丹花庵古墳：大谷晃二・松本岩雄・林 健亮・宮本正保1998「丹花庵古墳の測量調査」『古代文化研究』第6号墳 島根県古代文化センター

南塚古墳：川端真治・金関 恕1955「摂津豊川村南塚古墳調査概報」『史林』第38巻5号

林43号墳：勝部 衛1986「八束郡玉湯町林古墳群第43号墳の調査」『八雲立つ風土記の丘』No.79 八雲立つ風土記の丘

南下5号墳：2019年現地説明会資料

物集女車塚古墳：秋山浩三・山中 章ほか1988『物集女車塚』（向日市埋蔵文化財調査報告書 第23集）

## 【図版】

図1～10：筆者実測・作図（島根県所在古墳以外の鉄鍬資料は各報告書から再トレース）